

2012年12月2日開催

2012年上智大学・ベネッセ応用言語学シンポジウム報告書

s y m p o s i u m r e p o r t

2013年新課程・高校英語 「授業は英語で」を考える

— 何のために、どのように行うのか —

2012年12月

上智大学・ベネッセ応用言語学シンポジウムより

第1部 対談

新課程・高校英語「授業は英語で」その先にあるもの

— これからの時代、子どもたちに求められる力とは

吉田 研作(上智大学)、田中 茂範(慶應義塾大学)

第2部 講演

「授業は英語で」なぜ行うのか

— 生徒・教師は教室でどのように変わるのか

向後 秀明(文部科学省)

第3部 実践事例

「授業は英語で」どのように行うのか

— 3年間の見通し方、単元のつなぎ方、1時間の作り方

津久井 貴之(群馬県教育委員会、2011年度バーマー賞受賞)

根岸 雅史(東京外国語大学)、長沼 君主(東京外国語大学)

第4部 検討

「授業は英語で」行う上での課題について考える

— 「英語教師50人に聞きました」からみえてきたもの

— これからの時代、子どもたちに求められる力とは

津久井 貴之(群馬県教育委員会、2011年度バーマー賞受賞)

アレン玉井 光江(青山学院大学)、金森 強(松山大学)、根岸 雅史(東京外国語大学)

<ARCLE Webサイトのご案内>

<http://www.arcle.jp/>

ARCLEでの研究活動(イベント情報含む)・刊物などを

定期的に発信しています。*本冊子、研究紀要もダウンロードできます。

ベネッセ教育研究開発センター

ARCLE/アークルはベネッセ教育研究開発センターが運営する英語教育研究会です <http://www.arcle.jp/>

© Benesse Corporation 2013. All Rights Reserved.

■ シンポジウム概要

上智大学とARCLE(ベネッセ教育研究開発センターが運営する英語教育研究会)は、さる2012年12月2日(日)上智大学にて、「上智大学・ベネッセ応用言語学シンポジウム2012」を開催しました。6回目となる今回は、「授業は英語で行うことを基本とする」と謳われた高等学校新学習指導要領の本格実施を4ヶ月後に控え、テーマを「新課程直前・高校英語『授業は英語で』を考える一何のために、どのように行うのか」と設定し、高校教員をはじめとして、小中学校教員、大学教員、教育行政関係者など英語教育に関わる様々な立場の参加者が一堂に会して、その狙いや課題の解決の方向性について考えました。

プログラム1では、上智大学教授・吉田研作と慶應義塾大学教授・田中茂範先生による対談を行いました。グローバル化が進むこれからの日本の英語教育では、英語の知識を伝達することを中心とするのではなく、生徒が自分で考え判断して表現し、対話することができる「英語力」を伸ばすことが重要であるということを議論しました。

プログラム2では、文部科学省教科調査官・向後秀明先生の講演が行われ、英語による授業の本来の狙いを説明されました。それは現在の授業を英語に置き換えて教師中心に授業を進めるということではなく、英語による言語活動を充実させ、生徒が英語に触れたり、使ったりすることの機会を増やすことであると訴えられました。

プログラム3では、群馬県教育委員会指導主事・津久井貴之先生が、自身の群馬県の中等教育学校での指導実践を紹介し、生徒にとって「本当の勝負の時」はいつかを考え、「何を、いつ、どこまで」身につけてもらいたいかという目標を持って、授業や単元作りをすることの重要性を伝えられました。

プログラム4では、プログラム3の津久井先生の指導実践の内容をふまえて、「文法は日本語で解説しないと生徒が理解できたか不安になる」「苦手な生徒は英語だけで理解できるか」「(大学)入試に対応できる学力をつけられるか」の英語教師50人に対するアンケートから見えてきた3つの課題について検討しました。

以上、「授業は英語で行うことを基本とする」と謳われた高等学校新学習指導要領の本格実施に向け、高校教員を始めとする英語教育に関わる様々な立場の皆様のために、本シンポジウムの内容が少しでもお役に立つことを願い、報告書を刊行しました。今後もARCLEは教育現場での具体的な課題を見つけ、その解決のためのアクション・リサーチを推進し、日本の英語教育の改善のために研究を進めていく所存です。

上智大学 言語教育研究センター長・教授 / ARCLE 代表
吉田研作

■ 上智大学・ベネッセ応用言語学シンポジウム 2012 報告

タイトル: 新課程直前・高校英語「授業は英語で」を考える 一何のために、どのように行うのかー

12月2日に、上智大学にて「上智大学・ベネッセ応用言語学シンポジウム」を開催いたしました。英語指導に関わる高校の先生方を中心に、中学校の先生方、研究者、教育行政関係者、学生など 300名を超す皆様に全国からお越しいただき、大変有意義なシンポジウムとなりました。

「新課程直前・高校英語『授業は英語で』を考える 一何のために、どのように行うのかー」をテーマに、2013年度より始まる新課程・高校英語について議論を深めましたので、プログラム毎に詳細を報告いたします。

第1部 対談

新課程・高校英語「授業は英語で」その先にあるものーこれからの時代、子どもたちに求められる力とは

吉田 研作(上智大学)

田中 茂範(慶應義塾大学)

新課程・高校英語において「授業は英語で」行うことの意味について、教育課程という枠を超えて、これからの時代の子どもたちに求められる力という視点から考えました。

発表の概要

1. 「授業は英語で」行うのは、「たくましさ」と「しなやかさ」を身につけるため

英語教育というのは、教えるとか学ぶということではなく、英語力を鍛えるということ。

知識の伝達で終わらず、生徒自身が自分で発言をする、表現していくという力をつけさせないといけない。

2. 「授業は英語で」行う目的は、英語学習を活性化すること

英語で授業をすることを目的化してはいけない。目的は、英語教育、英語学習そのものを活性化することである。生徒の立場に立ち、生徒が自分で考え、自分で英語を使って、自らの表現をしていくためにはどのような授業が必要なのかを考える。

1. 「授業は英語で」行うのは、「たくましさ」と「しなやかさ」を身につけるため

田中 「授業は英語で」行うとはどういう意味を持つのか。それは知識としての英語ではなく、経験としての英語を生徒に獲得させるということで、それは学習者として「いつか、どこかで、誰かと」使う英語ではなく、表現者として「いま、ここ、わたし」の英語を身につけるということである。すなわち英語教育というのは、教えるとか学ぶということではなく、英語力を鍛えるということである。

現在のような多文化を生きる状況下では何が求められるか。これは「たくましさ」と「しなやかさ」だろう¹。「たくましさ」というのは、自分で考え、判断し、行動する力。英語教育においては自己表現力、自分のポジションを明確に表現する力。ただ、その場合、自分の常識を押しつけるだけではなく、対話する力も必要。これが「しなやかさ」だと思う。そう考えれば、多文化を生きる状況の中で個々人が世界的な視野を持ってたくましさとしなやかさを実践できるようにすること。これが英語教育の目標になるのではないかな。

吉田 英語力というのはとてもいい言葉である。そのような力を実際の教室でどう育てるか。今までの日本の英語教育は知識伝達型が中心だ。そのような状況で心配しているのは、日本語が英語に変わっただけで、結局は知識の伝達で終わってしまわないかということ。やはり生徒自身が自分で発言をする、表現していくという力をつけさせないといけない。そのためには、授業の中でグループ活動であるとかペアワーク、プロジェクトワークなど生徒たちがお互いに関わりを持ちながら一緒に共通のある目的に向かって言葉を使って何かをやって達成していく、そういうものがなければいけない。

¹ 田中茂範・アレン玉井光江・根岸雅史・吉田研作(編著) 2005. 『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み—ECF』リーベル出版

2「授業は英語で」行う目的は、英語学習を活性化すること

田中 多くの中高生にとって英語は教科書の中にだけある。または日本語と英語との置換の中にある。しかし、教科書というのは英語の世界の扉であるという認識が大事で、そこから興味を深めたりしながら、生徒が英語の世界(English world)に入ってそこを探索(explore)するというスタンスを持てば、とても exciting な授業が考えられるのではないかと。同時に、本来英語は人々の生活の中、日常の中にあるものだが、そういうリアリティのある英語という伝え方が残念ながらできていない。このような中で、英語で授業をすることに強制力を持つということは大きな意味があり、少なくとも和文英訳を封じ込めることができる。しかしながら、英語で授業をすることを目的化してはいけない。目的は、英語教育、英語学習そのものを活性化するためであり、そのためには、教材も活動も authentic で、meaningful で、personal なものでなければならない。

吉田 教師の立場というよりも学習者、生徒がどれだけ学ぶかという生徒の立場から考える。生徒が自分で考え、自分で英語を使って、自らの表現をしていくためにはどういう授業が必要なのか、そこを考えれば必ずとどんな授業をすればよいか見えてくるのではないかと。

第2部 講演

「授業は英語で」なぜ行うのか—生徒・教師は教室でどのように変わるのか

向後 秀明(文部科学省)

新学習指導要領「外国語」の本来のねらいについて、改めて理解を深めるために、そのねらいや留意すべき点を具体的な事例なども交えて解説いただき、ねらいに沿った指導を展開していくために気をつける点をお話しいただきました。

発表の概要

1. 日本の高校生の意識

調査結果から、日本の高校生は自己肯定感や満足感、そして学校生活に対する充実感も低く、悩みが深い様子がうかがえる。先生方には、是非、このような子どもたちを救ってほしい。

2. 「生涯学習」の視点—学校は生涯にわたって学び続ける基盤をつくる場所

学校は教育を完結する場ではなく、生涯にわたって学習するための基盤をつくる場所である。学習者の側からすれば、自律して学習していくことができるように、その基盤をつくる場所である。

3. 学習指導要領改訂の経緯とポイント

現行の学習指導要領と変わらず、「生きる力」の理念を継承。この「生きる力」をもとにした、外国語教育の改善に向けての基本方針のポイントは、「4技能を総合的に育成する指導を充実するよう改善を図る」こと、「4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する」ことなど。

4. 「授業は英語で行うことを基本とする」—新学習指導要領外国語科「第3款の4」

「授業は英語で行うことを基本とする」ことは、それ自体が目的ではなく、目的を達成するための手段である。このねらいは、英語による言語活動を授業の中心にすることによって、生徒が授業で英語を使って言語活動をしていることが重要。

5. 新しい科目のポイント

新学習指導要領外国語科の目標は「コミュニケーション能力を養う」ことだけであり、高校の外国語科の科目は一新される。

6. 新しい科目を上手く展開していくために必要なこと

(1) 校内研修

(2) 学習到達目標の設定と学習指導計画の作成

(3) 教科書などの教材の選び方

(4) 授業展開

(5) 観点別学習状況の評価

(6) 学校全体での取り組み

1. 日本の高校生の意識

まず、財団法人日本青少年研究所が2011年2月に発表した「高校生の心と体の健康に関する調査」²から、日本の高校生の意識を考えてみたい。「私は価値のある人間だと思う」という問いに対して、アメリカの高校生は約6割が「全くそうだ」と回答した一方で、日本の高校生は1割に満たなかった。また、「自分に満足している」かどうか聞いたところ、アメリカの高校生は4割以上が「全くそうだ」と答えたが、日本では「あまりそうではない」と「全然そうではない」の合計が8割を超えた。学校での状況についても、「学校において自分を理解して認めてくれる先生がいる」かどうかという問いには、「全くそうだ」と回答した高校生はアメリカで5割を超える一方、日本では1割に満たない。また「私は先生に優秀だと認められている」という問いに対して、「全くそうだ」と答えた高校生は、アメリカで4割を超える一方、日本ではわずか2%という結果だった。このように、日本の高校生は自分自身への評価や満足感、そして学校生活に対する充実感も低く、悩みが深い様子がうかがえる。先生方には、個々の生徒の様子をよく見て、悩みを抱えているかもしれないことを理解していただき、是非、このような子どもたちを救ってほしいと強く思っている。

2. 「生涯学習」の視点—学校は生涯にわたって学び続ける基盤をつくること

始めに、教育を生涯学習と学力という視点からお話しし、そこから学習指導要領の改訂がどのように行われ、新学習指導要領外国語の「第3款の4」での「授業は英語で行うことを基本とする」ことがどういう意味を持つのかをお話したい。

「生涯学習」について、先生方は実感として考える機会は多くはないかもしれないので、ある実業高校での事例をご紹介します。その学校の生徒の中に、人とコミュニケーションをとるのが非常に苦手な生徒がいたが、英語の授業ではペア・ワークやグループ・ワークが多いため、教師も非常に気を遣った。しかし、周囲の生徒がその生徒のことをとてもよく理解し、温かくサポートしてくれ、その生徒も周りの生徒もお互いに成長できたとのこと。当該生徒が卒業するにあたって、次のようなメッセージを英語を担当した教師に贈ってくれた。

「私は人と話すのが苦手で、英語も苦手だったけど、先生は授業の中でどうしても人と話さないといけない状況を作ってくれたから、休み時間では話さない人ともいっぱい話せて、自分のことともいっぱい話せて、クラスの仲間のことともいっぱい知ることができて、本当に楽しかったです。

私は、英語の授業の時だけ、別人になれたような気がします。公開授業の時も、緊張したけど、いつも通りみんな楽しんできて、とってもいい思い出です。先生、本当に、本当にありがとう。これからも、英語勉強するね。」

人と話すのは苦手な生徒だったが、この教師は生徒を英語嫌いにさせず、これからも英語を勉強するという意欲を持たせて卒業させることができた。こういうことが「生涯学習」の考えだ。では実際に、今紹介した生徒が所属しているクラスの授業の一部をご覧いただきたい。

※生徒が所属していたクラスの授業DVDを視聴:

文部科学省「高等学校版 新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践映像資料3」(授業実践DVD)
岐阜県立東濃実業高等学校 生活文化科 第3学年「英語Ⅱ」授業者: 亀谷みゆき教諭

「生涯学習」に関する規定は、教育基本法に下記のように新設された。

○ 教育基本法(平成18年12月22日法律第120号)

第3条

国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。

² 財団法人日本青少年研究所(2011)「高校生の心と体の健康に関する調査—日本・アメリカ・中国・韓国の比較—」調査概要 <http://www1.odn.ne.jp/youth-study/research/2011/gaiyo.pdf>

つまり、学校は教育を完結する場ではなく、生涯にわたって学習する基盤をつくる場所であることを意味している。学習者の側からすれば、在学時だけでなく学校を卒業した後も自律して学習していくことができるように、その基盤をつくる場であるということである。この点を理解していない高校では、「来年の目標は、国公立大学に 50 名以上合格させること」という目標を掲げてしまう。しかし、これは学校の都合であって、子どもたちの学びを考えるならば、「国公立大学 50 名」に入らなかった生徒たちにも、それぞれのキャリアプランがあって、それぞれの人生があることを忘れてはいけない。

「学力」については、その重要な要素として、学校教育法第30条の第2項で、①基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、②これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、③主体的に学習に取り組む態度を養うこと、と規定している。従来の教育では①の知識・技能の習得に偏りがちだったが、これからは①と②のバランスが大事である。③の主体的に学習に取り組む態度が「学力」に含まれることもおさえておきたい。

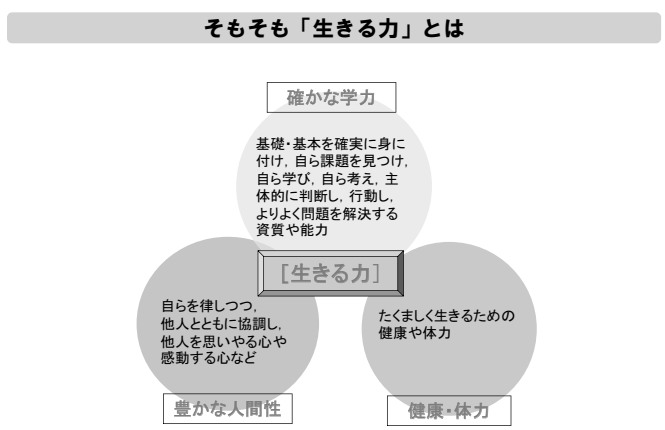
3. 学習指導要領改訂の経緯とポイント

ご存じのとおり、学習指導要領の改訂は、中央教育審議会³での答申を受けて行われているが、現行の学習指導要領と変わらず、今回の改訂による新学習指導要領でも「生きる力」の理念を継承している。また今回の答申の中で特徴的なのは、この「生きる力」の意味や必要性について、文部科学省による趣旨の周知徹底が必ずしも十分ではなかったことを初めて認めている点である。

では「生きる力」とは何か。それは「確かな学力」、
「豊かな人間性」及び「健康・体力」の3つである。
「確かな学力」については、先ほど述べた学校教育
法第30条の第2項に規定された学力であること
に気をつけたい。

この「生きる力」をもとに、中央教育審議会から外国語教育についてどのような答申があったかという
と、まずは、コミュニケーションの中で自らの考
えなどを相手に伝える「発信力」の育成がより重
要になっていることが挙げられている。また、中
学・高校を通じて、コミュニケーションの中で「基本
的な語彙や文構造を活用する力が十分に身につ
いていない」ことが指摘されている。この点は誤解されることが多いが、「語彙や文構造を活用する力が身につけていない、
だから練習問題をやる必要がある」ということではない。あくまでも、「基本的な語彙や文構造」を実際のコミュニケーションの
場面で使うことができるように指導しなければならない。この点以外にも、学年が進むにつれて英語嫌いが増えている点や、
「オーラル・コミュニケーション I」において「聞くこと」や「話すこと」を中心とした指導が十分になされていない実態がある、と
いったことが指摘されている。

そして、この答申を受けて示された学習指導要領外国語科の改善に向けての基本方針のポイントは、まず、「4技能を総合的



³ 中央教育審議会 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gaiyou/010201.htm
審議会の主な所掌事務

- (1) 文部科学大臣の諮問に応じて、①教育の振興及び生涯学習の推進を中核とした豊かな人間性を備えた創造的な人材の育成に関する重要事項、②スポーツの振興に関する重要事項を調査審議し、文部科学大臣に意見を述べること。
- (2) 文部科学大臣の諮問に応じて生涯学習に係る機会の整備に関する重要事項を調査審議し、文部科学大臣又は関係行政機関の長に意見を述べること。
- (3) 法令の規定に基づき審議会の権限に属させられた事項を処理すること。

に育成する指導を充実するよう改善を図る」とこと、「4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する」という点である。「総合的」とは、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの技能すべてという意味である。また、「統合的」というのは、これらの4技能のうち2つ以上の技能を絡めるという意味で、例えば、聞いたり読んだりしたことに基づいて自分の意見や考えなどを伝え合うといった活動が考えられる。また、次のポイントとしては、内容的にまとまりのある発信をできるように目指すことである。これは、いわゆる“英会話”を教えてくださいということではない。先に述べたように、4技能を統合した言語活動が必要であるということだ。最後のポイントは、今回の改訂の1つの特徴でもあるが、外国語だけでなく、すべての教科において、中学校段階での学習事項の定着をお願いしている点である。中学校段階での学習の定着が不十分である場合には、これらの学習事項の定着を図った上で、高等学校の学習に円滑に移行させてもらいたい。このことは、外国語科において、「コミュニケーション英語基礎」を創設するもとなった考えである。

4. 「授業は英語で行うことを基本とする」—新学習指導要領外国語科「第3款の4」

新学習指導要領を告示した際、外国語科で特に注目されたのは「第3款の4」である。

英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。

本規定の「授業は英語で行うことを基本とする」という部分が特にクローズアップされたが、大切なのは、これ自体は目的ではなく、生徒のコミュニケーション能力を養うという目的を達成するための手段だということである。このねらいは、英語による言語活動を授業の中心にすることで、生徒が英語に触れる機会や実際にコミュニケーションの場面で英語を使う機会を充実する、ということである。つまり、授業では、生徒が英語を使って言語活動をしていることが重要で、教師が一方向的に英語をしゃべって生徒はそれを聞いているだけという状態では、第3款の4の目的を達成できていないことになる。また、新学習指導要領外国語科の解説では、英語に関する各科目を指導するにあたって、文法について説明することに偏っていた場合は、その在り方を改める必要がある、と踏み込んだ記載になっている⁴。

日本語の使用については必ず議論になるが、確かに日本語を100%禁止しているわけではない。しかしながら、日本語を使用する場合でも、「英語による言語活動を行うことが授業の中心となっていれば」ということが大前提である。また、「必要に応じて」であり、必要がなければ使わないということである。当然のことながら、日本語だけの授業というのはあり得ない。また、新学習指導要領外国語科の解説では、日本語使用の事例として「文法の説明」をあげているが、これは文法の説明は日本語で行ったほうがよいという意味ではない。また、文法を“説明する”という概念にとらわれすぎていると、参考書や問題集のようなものに書かれていることを教師が英語で説明するといったことになってしまいがちである。しかし、文法はあくまでもコミュニケーションを支えるものとして位置付け、4技能を統合した活動と結びつけて使えるように指導してほしい。例えば、当該文法事項を多様な文の中で聞いたり読んだり、たくさん話したり書いたりする中で実際に使えるようにしてほしい。

そして、この新学習指導要領「第3款の4」は、外国語科、英語科のすべての科目に適用されることにも留意していただきたい。

5. 新しい科目のポイント

新学習指導要領外国語科の目標は「コミュニケーション能力を養う」、これだけである。生徒の可能性を教師の側から制限して「こんな活動は無理だろう」と思わず、どうやったらできるかを考えていただきたい。これまでの指導方針を180度変えて授業を行った先生方から、「生徒は意外にできますね」という感動の声を実際に多くいただいている。同時に、大学入試の結果だけを目標とせず、5年後、10年後といわず、20年後の生徒の姿、その時どんな力が必要になるかを考えながら教育にあたっていただきたい。

⁴ 高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2010/01/29/1282000_9.pdf

今後は各学校段階において、まず小学校では英語や外国語に興味、関心を持たせていただきたい。そして中学、高校段階では英語を英語で学ばせていただきたい。中学校の学習指導要領には授業を英語で行うとは書かれていないが、小学校で外国語活動を終えて中学校に入学してきた生徒たちを高校へ送り出していく中学校でも、できるだけ授業を英語で展開していけるように、大きく変わらなければならない。

このような流れの中にあって、高校の外国語科における科目は一新され、現行の科目は1つも残らない。「コミュニケーション英語基礎」は、中学校における学習の確実な定着と、高校ですべての生徒が履修することになる「コミュニケーション英語Ⅰ」への円滑な接続が目的である。「コミュニケーション英語基礎」は、新年度、かなり多くの学校で採用されるようだ。必修科目である「コミュニケーション英語Ⅰ」のポイントは、4技能を総合的に育成することにある。「コミュニケーション英語Ⅱ」では、更に、速読、精読という文言が出ているが、これを日本語ではなく英語で行うことになる。例えば、教科書中の英語をパラフレーズして、本文から英語を抜き出すだけでは対応できないようにサマリー・チャートを作って提示する。生徒はそのサマリー・チャートを完成させていく過程で、英語を用いながら精読する力が問われる。「コミュニケーション英語Ⅲ」では、大学入試に合格するために受験問題集を解く、などとは書かれておらず、総合的なコミュニケーション能力を育成する集大成の科目ととらえていただきたい。高校2年生までは4技能を総合的に指導し、技能を統合的に使う授業を行っているが、3年生になって「受験が近くなったので終わり」というのでは意味がない。

「英語表現Ⅰ」は話したり、書いたりする言語活動が中心であり、コミュニケーションと切り離して文法を体系的に指導する科目だと誤解しないでほしい。あくまでも事実や意見を多様な観点から考察して、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養うことをねらいとしている。この科目では、即興で話すことができるようになることも求めている。「英語表現Ⅱ」では、例えば、主題を決めて文章を書いたり、討論を行ったりする言語活動を展開することになる。趣旨を十分に理解した上で、これらの科目を効果的に指導していただきたい。

「英語会話」では、海外での生活に必要な基本的な表現を使って会話するという言語活動も含まれている点に留意してほしい。

6. 新しい科目を上手く展開していくために必要なこと

(1)校内研修

まずは先生方が、外国語科の目標は「コミュニケーション能力を養う」ことだということをよくご理解いただきたい。この目標を達成するために、4つの技能を総合的に育成することをお願いしている。このような先生方に求められていることについて、文部科学省や教育委員会が主催する研修などに加え、各学校の外国語科の中で、学習指導要領に書かれていることや新しい科目で育成する力への理解を深めたり、指導の方法などを検討したりする研修を行っていただきたい。

(2)学習到達目標の設定と学習指導計画の作成

学習指導要領は方向目標であるため、それを、学校ごとに独自の学習成果、学習到達目標という形に落とし込んでいく必要がある。例えば、現在、CAN-DO リスト形式による学習到達目標の設定についての検討会を文部科学省で行っているが、今後は、各学校において、卒業時点での最終的な学習成果や学習到達目標から逆算して、学年ごと、科目ごとに学習指導計画を作成していくことになる。「逆算して」というと簡単に聞こえるかもしれないが、初めて作成する場合は、かなり時間的な余裕を持っておかないと間に合わない。誰が異動してきても、誰が指導しても、同じように指導ができるようにするために、このあたりの準備は早めをお願いしたい。

(3)教科書などの教材の選び方

教材の選び方も大事である。生徒の視点に立ち、英語での言語活動を展開するために適した教材を選んでいただきたい。例えば、生徒たちの英語力のレベルに適したもので(英語が難しすぎるものではなく)、内容的におもしろいものがよい。また、本文の中で提起された問題に対して完全な解決策まで出てしまっているものよりも、生徒の考える余地が残っている教材の

ほうがよいであろう。

(4)授業展開

先生方が新しい指導方法に慣れるまでは、授業の展開を事前にかなり細かく決めておく必要があるかもしれない。全員の先生方が同じように動くためには、始めはある程度細かく決めておき、慣れてくれば細かなことは省いていってよいだろう。例えば、ワークシート上に、各活動の指示内容を英語で記載しておくというのも、最初は有効だと思う。また、言語活動は、生徒が飽きてしまわないように1つ1つを長くせず、5～10分程度にする。ペアやグループでの活動を中心とした授業にし、授業の始めからペア、グループ活動を行うという意気込みが大事である。これは、1学期は日本語による指導が中心で、2学期から英語にすることが非常に難しいのと一緒で、授業開始後30分を講義形式で行い、その後ペア・ワークやグループ・ワークを行っても、生徒はとまどってしまう。最後に、参考までに、教科書を使った授業の展開例をお示する。

教科書の教材化（授業のフォーマット化）

授業展開例

- ① Warm up :
Everyday conversation
- ② Review :
Listening? Note-taking? Oral summary
- ③ What Do You Think?:
Speech, Role play, Discussion
- ④ Outlining through Listening:
Topic, Key expressions, T-F questions
- ⑤ Reading Comprehension :
Summary writing (Oral summary)
- ⑥ Expressions & Structures :
Vocabulary, Idioms, Grammar

(5)観点別学習状況の評価

学習指導要領で求めていることを評価する際には、特に「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」を、計画的にバランスよく評価する必要がある。授業は4技能総合型にしたけれども、これまでと同じ方法で定期考査などの筆記テストのみによって評価をしていたのでは、指導と評価がかみ合わなくなる。また、生徒も授業でやっていることと評価されていることの違いに気づき、せつかくの授業が破たんしてしまう。とりわけ、「外国語表現の能力」の適切な評価を実施していただきたい(例:「話すこと」における「外国語表現能力」を見取るためには、インタビューテストなどを行うことが考えられる。事例の詳細については、国立教育政策研究所の資料⁵⁾参照。

(6)学校全体での取り組み

言語活動は、外国語科だけではなく、学校全体で充実していくことが重要である。例えば、数学や理科の授業でもグループ・ワークを行っている学校は、外国語科での言語活動がやりやすい。そして、ご自身が担当しているクラスと他のクラスのテストの点数を比べるといったことをしないで、是非、先生方一人ひとりが、「Students in MY class」ではなく、「OUR school's students」という視点を持って、学校全体で取り組んでいただきたい。

質疑応答

質問(公立高校教師) 授業の中でディスカッションやペア・ワークなどの活動をするのが重要だということは大変よくわかったが、教科書の本文を、和訳をせずどのように英語で指導すればよいのか、具体的に教えていただきたい。

向後 ゴールはあくまでも英語によるコミュニケーション能力そのものを身につけることであって、日本語に訳す力ではないという点が重要である。日本語に訳しても英語の力が身につくわけではない。ある単語がわからないために全体像が理解できないというのであれば、教師が本文を言い換えたり、ワークシート上にパラフレーズする仕掛けをつくって精読させたりする

⁵⁾ 国立教育政策研究所 評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryoku.html>

* 高等学校・外国語 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/11_kou_gaikokugo.pdf

といった活動が考えられる。テキストすべてを理解させる、という考え方ではなく、活動をするためにはテキストをどのように利用したらいいか、どの情報を取らせる必要があるのかなど、指導のねらいに合わせて教科書の扱い方を考えることが重要である。

第3部 実践事例

「授業は英語で」どのように行うのかー3年間の見通し方、単元のつなぎ方、1時間の作り方

実践事例	津久井 貴之(群馬県教育委員会)
コーディネーター	根岸 雅史(東京外国語大学)
コメントーター	長沼 君主(東京外国語大学)

新課程での指導の1例として、文部科学省配布のDVD*1 に収録されている群馬県立中央中等教育学校(平成19、20年度SELHi*2 指定)での津久井貴之先生の実践をもとに、生徒に身につけさせたい力、それを踏まえた授業・単元の作り方についてお話しいただきました。

*1 文部科学省「高等学校版 新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践映像資料3」(授業実践DVD)

*2 SELHiとは、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールのこと。文部科学省では、英語教育の先進事例となるような学校づくりを推進するため、英語教育を重点的に行う高等学校等を指定し、英語教育を重視したカリキュラムの開発、大学や中学校等との効果的な連携方策等についての実践研究を実施する「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHi)」事業を平成14年度から開始し、延べ166件169校で実施した。(文部科学省ウェブサイトより)

発表概要

1. 教師の願いと生徒に身につけさせたい力

生徒たちが高校卒業後の社会で、役立つ力をつけているかどうかを考える。高校卒業後にどんな大人になってほしいかを教師の中で明確にする。

2. 授業の作り方

単元や授業のねらいを明確にすることは、その時間内に全てを身につけるとか覚える、ということではない。また、「教えた時」がイコール「学ぶ時」というわけではない。授業の設計では、まず、単元全体の目標を設定し、その単元での中心の言語活動の目標を設定する。

3. 指導計画

指導計画は非常に大事。その際、扱う単元で生徒たちに身につけさせたい力、つまり、目標を達成した時の生徒たちの英語を使う姿を明確にすることも大事。

4. 授業・単元の作り方のポイント―「3つの改善の視点+1」

- ①単元での言語活動は、単元の授業があるからこそできるレベルの内容、パフォーマンスにする。
- ②ねらいとやっていること活動をあわせる。
- ③最後のゴールに向けてステップをしっかりと刻む。

「+1」として、「知識の伝達」の場ではなく、「学び方を学ぶ」場としての授業を意識する。

意見交換

- (1)「授業は英語で」行うハードルを乗り越える
- (2)教えた時≠学び時を意識する
- (3)長期的な見通しと単元の軽重をつける
- (4)大学入試と授業を分けない
- (5)英文読解をこうやってみる

1. 教師の願いと生徒に身につけさせたい力

授業を行う前提として、生徒に身につけさせたい力を明らかにする必要がある。生徒たちにとって本当の勝負はいつかを考え、その時に「こうあってほしい」、「ここまで身につけてほしい」、「そのために何をいつ、どこまで」教えるかのゴール設定を

する必要がある。そう考えると本当の勝負の場は高校卒業後の社会で、そこで役に立つ力、あるいは、更に学び続けられる力をつけているかどうかが重要。私の場合は、教師の願いとして、英語を通して世界を広げてほしい、学び続けられる人になってほしいということがあり、理想とする生徒の姿として、自己表現力を身につけ、必要に応じて学び方を選択できるようになってほしいと思っている。そして、理想とする授業は、学習方法やコミュニケーションの大切さ、裏返していうと「難しさ」も学べる場であり、自己表現力を鍛えられる場であると考えている。生徒たちが高校卒業後、どんな大人になってほしいか、という教師の願いは大切にしたい。

2. 授業の作り方

授業では、まずは教師のほうが「曖昧さ」への耐性を持つことが大事である。1つの単元や授業のねらいは、その時間内だけで何かを身につけるとか覚えるということではない。すなわち、教えた時がイコール学び時というわけではない。

具体的な授業の設計では、まず、単元全体の目標を設定する。そして、その単元での中心の言語活動の目標を設定する。その際、注意する点は3つある。①言語活動の目的を明確にすること。②授業で扱う内容とタイミングが生徒の生活や関心に適したものかを見極める。扱う内容は生徒の知的レベルに対して、幼すぎても難しすぎてもいけない。そして、③生徒の「伸びしろ」を期待できる言語活動かどうか。教師からみて、少し難しいかなと感じる位の言語活動でよいと思う。こちらが意図したような活動を生徒たちはすぐにできないかもしれないが、その活動ができるように、生徒の力を引き上げるのが授業であり、時には、コミュニケーションの大切さと併せて難しさを感じたり、新たな学習へのモチベーションを持つことができればよい。

この後、DVDで紹介する授業では次のように目標を設定した。

* 文部科学省「高等学校版 新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践映像資料3」(授業実践 DVD)、群馬県立中央中等教育学校 普通科第5学年「英語Ⅱ」授業者:津久井貴之教諭を10分程度に編集したもの

◎単元全体の目標設定

スティーブ・ジョブズのスタンフォード大学におけるスピーチ(Stanford University's 114th Commencement on June 12, 2005)、本人の生い立ちや経歴を様々な英文資料や映像を通して理解するとともに、次年度に最上級生となる生徒一人ひとりが、自分の進路選択や日々の生活と照らし合わせて共感したり考えさせられたりしたことを英語で伝え合うことができるようになる。

◎言語活動の目標設定

- ア 感想や自分の考えなどを、相手が理解しやすいように工夫しながら話す。
- イ 既習の言語材料を用い、教材内容を紹介したり感想を伝えたりするとともに、自分の進路選択や学校生活について考えていることを伝える。
- ウ 他生徒の発表を聞いて正しく理解し、感想を伝える。
- エ 既習の言語材料に関する用法や語法を理解する。

3. 指導計画

指導計画は非常に大事で、特に、指導計画に記載されない次ページ<指導計画>の①~③のような、扱う単元で生徒たちに持ってほしい気持ちやなしてほしい姿を設定することも大事である。というのは、教科書や本文を見た時に、そのタイミングで生徒の置かれている状況、興味や関心を考え、教科書や本文の内容が生徒にとって何らかの意味を持つものにしたからである。今回、DVDで紹介する授業は、下記の表のように合計7時間の計画を立てた。なお、表の()内の太字は、実際に授業でやったことを後から書き足した点である。

教科書はそのままでは使わず加工して、スピーチの本文のみを使用した。というのは、この教科書ではスティーブ・ジョブズのスピーチを3つのセクションに区切って、それぞれに要約をつけてあり、生徒は、本文を読まなくてもその要約を読んだだけで、スピーチで言いたいことがわかってしまう。また、実際のスピーチ映像を見るので、写真もカットした。このようなところも、教科書を扱う際に気をつけたことである。

<指導計画>

- ① 高校2年冬、高3での履修科目の選択を終え、大学受験や自分の進路に不安を抱いている「心の声(inner voice)」を表現させたい。生徒同士でそれぞれの「思い」を共有させたい。
- ② 教科書の原典となるスピーチを収録したDVDを視聴し、そのスピーチのメッセージを読み取らせたい。
- ③ 生徒にも身近なアップル社の製品とその背景(スティーブ・ジョブズの人生観や仕事への情熱、厳しさ、人生における様々な障害など)の両面を理解させたい。驚きや共感、感動のないところに、伝えたいことは生まれてこないで、それを起こすことをねらいとした。

指導内容	配当時間
<p>スティーブ・ジョブズについてのオーラル・イントロダクションを聞き取る。 (教師が説明をしすぎない。内容に興味を持たせる程度に。) また、スタンフォード大学でのスピーチ映像を視聴し、その要旨をグループで確認し合う。 (映像がある場合は、いつ見せるのかが大事。単元の学習のまとめに「ご褒美」的に見せるのではなく、ねらいを持ってタイミングよく。)</p>	1時間
<p>スピーチ原稿を読み、グループで要旨を確認するとともに、スピーチに含まれている3つのメッセージを読み取る。 (教科書本文やセクションの構成を見て、原典を使うことにする。) (教科書本文の英文との比較をうまく使う。)</p>	1時間
<p>スピーチに含まれている3つのメッセージを英語で要約する。また、スティーブ・ジョブズによる製品のプレゼンテーションの映像を見たり、本人を特集した記事を英文で読んだりして、製品の特徴やプレゼンテーションの工夫、人生観を読み取る。 (製品のプレゼン映像とエピソードの紹介を行う。) (補足の読み物資料や映像資料を使う。読み物については、家庭学習と連動させてもよい。)</p>	1時間
<p>スピーチ原稿の中から共感したり印象に残ったりした一節を選んで紹介する。 (スピーチ原稿中の英文に下線を引かせる。どこに下線を引いたのか、なぜそこに引いたのか、伝え合う活動を行う。) とともに、選んだ理由や生徒自身の生活と照らし合わせて感じたことを英語で書き、発表し合う。手順は以下のとおり。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 書いた英文を教師が推敲し、個人やペアで発表する練習を行う。 (書いた英文の推敲は、大きな文法上の誤用や構成を中心に。細かなスペルミスや簡単な文法のミスは、ペアやグループで修正させる。) (Read & Look up の要領で発表練習をする。ペアで発表し合うことで、難しい表現の再校正や伝え方の修正を行う。) ② 教師の前で発表練習を行い、アドバイスを受ける。 (ALTに手伝ってもらってもよい。) ③ グループ内で1人ずつ発表を行う。 ④ グループ内で互いの原稿を読み合い、内容に関わって感想や共感した部分などを50語程度の英語で書く。 (実際には④のとおりではなく、読み合う活動を行った後に、ここまで断続的に行ってきた「英文英訳」に取り組ませた。) 	4時間 (本時3時間目)

4. 授業・単元の作り方のポイント―「3つの改善の視点+1」

授業・単元づくりを具体的に改善していくにあたって、かつての同僚の先生方と整理した授業の「3つの改善の視点+1」をご紹介します。

- ① 単元での言語活動は、単元の授業があるからこそ表現できるレベルの内容、パフォーマンスをゴールにする。
 まずは、単元自体を魅力的で、チャレンジングなものにする。言語活動は、少し難しいかなと思っても、今の生徒の英語力では無理そうだからやめておこうと思うのではなく、是非やってみてほしい。逆にその言語活動ができるようにするために、どう単元を作っていくかを工夫する。

②ねらいとやっていることが合っているかどうかを常に意識する。

言語活動を行うこと自体が目的化しないように気をつけ、言語活動のねらいが「ぶれ」たり、言語活動と単元全体のねらいが「ずれ」たりしていないか注意する。

③最後のゴールに向けてステップをしっかりと刻む。

徹底して練習させることで、最終的に生徒たちに求める言語活動のレベルに向けて、生徒たちの英語への不安を取り除き、言語活動へのきちんとした readiness をつくる。また、このようなステップが単元で計画されているかという視点で検証する。

そして「+1」として付け加えたいのが、自ら英語を学び続けることのできる生徒を育てるために、「学び方を学ぶ」場としての授業をつくるということ。そのために私は、ノート指導を行った。授業用のノートではなく自己表現のためのノート。中学校の先生方の実践を参考にし、自分の作品のような形でノートに残していく。そうすることで生徒自身が自分の学習履歴として振り返ることができるだけでなく、むしろ我々教える側がどの時点でどの程度までできているか、生徒の状態を確認することができる。あとは英語通信や自主学习など、いろいろなやり方があると思うが、それぞれの学校やクラスの実情に合わせて取り入れる。

意見交換

(1)「授業は英語で」行うハードルを乗り越える

根岸 生徒たち、そして教員の皆さんが持つ「英語」に対して、生きた言葉でありコミュニケーションのための道具であるというイメージを持つ人ももちろんいるだろうが、一方で、文法や書き換え問題、和訳などに、面白味を感じている人もけっして少数ではないだろう。このようなタイプの教師にとっては、キャリア半ばで突然、今までやってこなかった英語を道具として使うための授業を行うのは、かなりハードルが高いだろうと想像できる。また普段、教室外で、日本語で話しかけている生徒に向かって英語を話すことのハードルもあるだろう。津久井先生はこのようなハードルをどのように乗り越えたのか。

津久井 まずは教師が、英語を本当にやりとりの道具として使うことが大事だと思っている。クラスルームイングリッシュ集やマニュアルといったものがあるが、私自身が英語で授業をする際、自分の言葉で語ろうとしたときに最初は英語で書き出した。ただ、それだと暗記になってしまい、生徒には言葉として伝わっていないことが多かった。そのため、できるだけメモだけを頼りに語ることにした。そうしないと、“Are you ready?”と言っても生徒の反応がないうちに“OK, let's start.”と言って始めたり、“Do you understand?” “OK.”と教師が1人で納得して始めてしまったりするからだ。

そして、同僚の先生方との指導観の違いというハードルもあるだろう。私の場合、中高一貫校に赴任した際、中学校で教えた経験しかないまま高校で教えることになり、最初は高校の先生のやり方を真似たりした。同僚の先生と話し合いながら、お互いの指導の方向性が同じになったと感じるまでに3年ぐらいかかった。時間はかかるが、お互いに授業づくりに対して率直に意見や感想を述べ合える関係ができるかどうか。生徒に対しては、“Do you understand?”や“How are you?”等のごく簡単なやりとりでもきちんと意思疎通できること、先生同士でその方向性の共有ができることでだいぶ楽になると思う。

(2)教えた時≠学び時を意識する

根岸 教えた時イコール学び時ではない、教えたからすぐ学んでいる、できるということではなくて、実際は教えてからできるようになるまでには非常に時間がかかるということの指摘がある。これは学習、指導、それから評価のことにも絡んでくるが、具体的にどのようなことをしたのか。

津久井 文法の説明をしたことが、その文法を使えることではないということを認識し、「時間差」を踏まえた継続的な復習を促した。言語活動でも、既習の表現が使えた時に、きちんと教師が評価し、使えたことを伝えてあげたい。定期考査では、1学期に扱った文法項目を1学期はもちろん、3学期にも出題する、英文などはちょっと書き換えたりして出題するというをやった。そうすると生徒もテストを捨てずに復習に使っていて、何度も繰り返し学ぶというメリットはあったと思う。

根岸 今の学校現場での評価システムでは、中間・期末などの指導した直後の評価だけを見て先生が安心したり、不安になったりするが、本当はその後の習得を見ていくことは英語のような教科には特に必要だ。

(3)長期的な見通しと単元の軽重をつける

津久井 先ほど示した指導計画は全体で7時間と少し長くなっているが、実は7時間でも足りなかった。レッスンやセッションごとに均等に時間配分をする必要はなく、15 時間かけるものも1時間で終えるものもある。そうするためには、3年間の長期的見通しを持って、単元の軽重をつける。

根岸 1 時間 1 時間の授業はもちろん重要だが、高校3年間トータルで何を身につけさせるのか、その見通しを持って、授業に軽重があつてよいという考え方がとてもよいと思う。

長沼 毎回の授業で言語活動を行おうと思うと非常に重いレッスンばかりになってしまうので、長期的な見通しを持って授業の軽重をつけるというのはいいと思う。また、津久井先生の中学校での指導の経験から得た、中学校の教科書観・活動観があるからこそ、高校での言語活動ができたと思う。同僚との関係性にもつながってくるが、このあたりのお互いの価値観や英語観などを出し合い、大事にする点、面白いと思った点などを同僚の先生と共有していくことで、同僚の先生方との指導の方向性などのすり合わせができてきたのではないかな。そうすれば「授業は英語で」が後からついてくるというようなことになったのはいいと思う。

(4)大学入試と授業を分けない

根岸 大学入試との関連で、特に進学校の先生方は、英語で行う授業と大学入試の対策は別物であると考えられているように思うがこのあたりどうお考えか。

津久井 大学入試合格が高校段階でのゴールではないという意識は大事だが、とはいっても大学入試合格という結果が求められるのも事実。けれども、大学入試対策と授業を分けないようにした。授業の中で徹底して生徒の英語による表現力を高めていけば、それ自体が大学入試対策であり、本質的な英語力を育成することによって、大学入試は十分に突破できると思っている。そういう意味では、高1から大学入試対策をしているとも言える。また、先輩の先生方や当時の SELHi 指導委員の先生から大学入試よりも大きな力として英語力を身につけているのだから、自信を持ってやっていいと言っていたことも大変心強かった。

(5)英文読解をこうやってみる

津久井 常にボトムアップで、構文分析をして、文法を理解し、その上でテキストがやっと読めるというのではなく、全体をとらえることが大事。大学入試もだいぶ変わってきている。まずは、全体を最後まで読んで、ぼんやりでもいいから何を言おうとしているのかをとらえる。ボトムアップ的な読みが必要ないということではなく、早いうちから良い意味で、わからない所が部分的にあってもよしとする「曖昧さ」を持ち、多様多量の英文に触れようとする姿勢を育てたい。

また、英文読解の際の1つのアイデアとして英語で言い換える活動をご紹介したい。授業で扱ったスティーブ・ジョブズのスピーチに、“Stay hungry, stay foolish.”という有名なフレーズがあったので、このフレーズを英語で言い換えてみるという活動をやってみた。そうするとある生徒は“Don't be satisfied with what you have done, do what ordinary people don't do.”とパラフレーズした。こうしたクリエイティブな活動も、「授業は英語」で行うにあたって効果的であるし、生徒が英文の意味を理解しているか、英文読解や和訳をどうするか、という際のヒントになるのではと思う。

第4部 検討

「授業は英語で」行う上での課題について考える—アンケート「英語教師 50 人に聞きました」からみえてきたもの

コーディネーター 吉田 研作(上智大学)
パネリスト 津久井 貴之(群馬県教育委員会)
アレン玉井 光江(青山学院大学)
金森 強(松山大学)
根岸 雅史(東京外国語大学)

シンポジウム最後の本プログラムでは、英語教師 50 人へのアンケート結果を踏まえて、新課程のねらいに沿った指導をするにあたって先生方がお持ちの不安や課題について検討しました。

発表概要

1. 新課程・高校英語 先生方の抱える不安や課題 吉田研作(上智大学)

新課程・高校英語について高校の先生方にアンケートを行った結果より、「授業は英語で」行うにあたっての不安や課題トップ3に下記の点があがった。このプログラムでは、これらの3点について検討する。

1. 文法は日本語で説明しないと生徒が理解できたか不安になる
2. 苦手な生徒は英語だけで理解できるか
3. 入試に対応できる学力をつけられるか

2. 「苦手な生徒は英語だけで理解できるか」—「英語が苦手」の真の意味 金森強(松山大学)

英語が「苦手な生徒」たちは、苦手なのは英語だけではない。このような生徒たちが学ぶことの楽しさに触れられるようにする教師の努力が大事だ。

3. 「苦手な生徒は英語だけで理解できるか」—英語の力を育てる meaningful context と日本語でのコミュニケーション能力 アレン玉井光江(青山学院大学)

英語に実際に接する時間が少ない日本では、文脈の中で言葉を育てる meaningful context が重要であり、英語でのコミュニケーション能力を育てるためには基礎となる日本語でのコミュニケーション能力を育てることが重要である。

4. 「入試に対応できる学力をつけられるか」大学入試に対応できる力の育成—生徒のニーズに寄り添い、学び方を身につけさせる 津久井貴之(群馬県教育委員会)

生徒の自己表現の幅を広げるために「基本例文・フレーズ集」を作成。定期考査も繰り返し復習できるような工夫をした。授業を中心にすべてをつなげ、学び方を身につけさせていく。

5. 不安・課題からみえてきたもの—「まずはやってみる！」勇気を持とう 根岸雅史(東京外国語大学)

教師は完璧な存在のように見えるが、英語を技能として考えると、教師自身も勉強していかないといけない。そして、まずは「えいやっ！」とやってみることが、一番大切。

質疑応答

1. 新課程・高校英語 先生方の抱える不安や課題 吉田研作(上智大学)

ARCLE では、新課程・高校英語に関して直接の聞き取り方式で、高校英語の先生方の声をうかがった。その中で、次年度・ご自身の授業の中で英語を使う割合について聞いたところ「概ね使う」が2割程度であった。気になるのは、「あまり使わない」が3割弱であったことだ。恐らく、様々な不安や課題があつてのことだと思われる。このアンケートの中で聞いた、授業を英語で行う上での不安・課題のトップ3には下記の点があがった。ここからは、これらの問題について検討していく。

1. 文法は日本語で説明しないと生徒が理解できたか不安になる
2. 苦手な生徒は英語だけで理解できるか
3. 入試に対応できる学力をつけられるか

目的 高校英語の先生方の声を直接お伺いする

方法 直接の聞き取り中心

時期 2012年8月初旬～9月上旬

対象 高等学校英語教諭(常勤、非常勤)計50名

<内訳>

「全国英語教育学会」参加の先生 29名

首都圏・私立高校 11名

近畿圏・公立高校 6名

他 4名

2. 「苦手な生徒は英語だけで理解できるか」—「英語が苦手」の真の意味 金森強(松山大学)

英語が「苦手な生徒」は、実は苦手なのは英語だけではなく、考えることが嫌だ、自分に自信を持っていない、将来の夢がない…といったこともあるかもしれない。この根本的なことから考えていくことも若干必要ではないかと思う。そのような生徒には、まず、英語学習に興味を持たせ、高校の先生は中学の先生とは違うんだという期待を抱かせなければいけない。これまで英語は苦手だったけど、再チャレンジできそうだと思う雰囲気をつくってあげなければならない。英語の授業に興味を示さない生徒の多い高校で教師が生徒にアンケート調査をしたところ「文法が難しい」「単語を覚えきれない」という声が多かった。そこで、まずは、単語を覚えやすくする・覚えたくなるよう、絵もついたデジタルフラッシュカードを作って毎回の授業でゲームのように取り組む工夫をしてみた。半年経ったところ「前より単語が覚えられるようになった」「わかるようになった」という生徒が出てきた。英語への自信を取り戻せた生徒の授業態度は大きく変わったと言う。このような取り組みがまずはスタートだと思う。普段から、少しずつ工夫しながら生徒たちが学ぶことの楽しさに触れられるようにする教師の努力が大事だと思う。

また、他教科との連携も有効である。英語の授業の中だけで扱うことが難しいテーマも他教科でいろいろなことに触れ、考え、心が動けば取り組みやすくなる。受信活動を通して誰かに伝えたいくなるような気持ちを育て、そこで発信するための英語が必要になり、英語の授業で発信する活動があれば一番スムーズに行くのではないだろうか。

最後に「コミュニケーション英語基礎」は全国の高校で取ってほしい。中学までの英語の力が十分ついていない生徒の多い高校の方が多いと思う。しっかりと中学校までに身につけるべき英語の基礎力を充実させるための指導を、まず少しずつ少しずつ英語でやっていくのが第一歩だろうと思う。「コミュニケーション英語基礎」の教科書を作った会社が1社しかなかったことは大変残念に思う。

3. 「苦手な生徒は英語だけで理解できるか」—英語の力を育てる meaningful context と日本語でのコミュニケーション能力 アレン玉井光江(青山学院大学)

これからの時代、子どもたちにも求められる英語の力という観点から、2つの提案をさせていただきたい。その2つとは、英語に実際に接する時間が少ない日本で、いわゆる文脈の中で言葉を育てる meaningful context の重要さと、日本語でのコミュニケーション能力の重要さである。

私は8年ほど公立小学校の中に入り、担任の先生と共同で小学生に英語を教えてきている。その中で meaningful context の中で英語に接してもらうようにすることを柱の1つとして実践している。しかしながら小学校は今のところ週1回しか授業がないので、その限られた時間内でいかにして効果を上げるかを考え、ストーリーを使うことにした。Storytelling においてリスニング能力を伸ばし、さらに私が Joint Storytelling と名付けた活動において、聞いたものを retelling する活動をし、音声は確実に体の中に入った後に reading に発展させるという活動を行っている。

第一言語、第二言語にかかわらず、意味のある文脈なしでは言葉の力は絶対に育たない。英語が文脈のある中で提示されることで、多量の英語を聞くことに耐える力を育む。また曖昧さに耐えながら学ぶことが大切であり、そこで学びに向かう姿勢を育てていくことができる。たくさん量を聞く力を獲得した子どもたちには、自分でできるということを学んでもらうために、pushed output である言わせる活動を行う。自分の声を出してそれを聞く、という聴覚からのフィードバックが言語習得のカギであると言われている。つまり話すことは話すことによって身につける。使って初めて彼らは言葉の深さに出会っていく。そして言葉が自分のものになっていったとき、子どもは「わかった」と感じる。私はこれを Language Ownership と呼んでいる。これは吉田先生がおっしゃったことだが、「わかった」と決めるのは学習者である、と。すみずみまでわかる理解でなくても十分で、それを横から教師が「この辺が難しいから訳してあげよう」などとするのは余計なことである。

最後に、英語のコミュニケーション能力に深く関わると考えられる日本語のコミュニケーション能力 10 項目と、実際の英語コミュニケーション能力との相関について調査した結果を少し紹介したい。以下の 10 項目は英語コミュニケーション能力に深く関わると考えた、日本語のコミュニケーション能力である。

1. 相手が何を言いたいのか想像しながら聞いている。
2. 相手が話しやすいように、聞いてあげている。
3. 相手の言うことがわからない時は、もう一度言ってもらう。
4. 相手が(自分と)違う意見を言っても、しっかり聞いている。
5. 相手が理解できるように話をしている。
6. 相手の気持ちを考えながら話している。
7. 自分だけが話さないように気をつけている。
8. 相手(の意見)と(自分の)意見が違っていても、自分の意見を言う。
9. (自分と相手の)意見が違って、相手の意見が正しかったら賛成する。
10. みんなの意見をまとめることができる。

私立小学校の3、4年生合計 224 名にこの 10 項目について自己評価してもらい、(株)ベネッセコーポレーションが開発した小学生の英語コミュニケーション能力を測るテスト GTEC Junior を受けてもらって、その相関関係を調べた。その結果、日本語のコミュニケーション能力の自己評価の結果と英語コミュニケーション能力には、あまり強くはないものの相関関係があることがわかった。やはり日本語のコミュニケーション能力が高い子どもたちは、他人とどのように関わっていけるかを考えながら言葉を使っている子どもたちであり、そのような子どもたちには英語コミュニケーション能力も後天的についてくると考える。

以上のことから、英語が苦手というか、まだ学習を始めたばかりの子どもたち、すなわち英語力が低いと思われる子どもたちについても意味のある文脈の中で英語を育てていくこと、その基礎になっている日本語でのコミュニケーション能力を育てていくことで、英語コミュニケーション能力を高めることができるということを提案したい。

4. 「入試に対応できる学力をつけられるか」大学入試に対応できる力の育成—生徒のニーズに寄り添い、学び方を身につけさせる 津久井貴之(群馬県教育委員会)

授業以外で大学入試に対応するためにどんな指導をしたかについて触れたい。まず、授業の中での言語活動を下支えする、基本例文・フレーズ集を作成して、いろいろなところで使わせた。ただリストを作るにしても、教科書から新出語をそのまま抜き出すというのではなく、生徒が表現する際によく間違えるもの、自己表現に使いたいものなどにこだわって作成した。先日見学したある中学校の授業で、生徒は「サリバン先生のおかげです」という文を作りたかったようで、5人ぐらいが thanks to を使っていた。これは辞書を開いて「おかげ」を調べると thanks to が出ているのでそれを使ったのであろうが、例えばサリバン先生を主語にして、help, take care of などが使えるといい。そして、リストに入れておけば、生徒は、「〇〇くんのおかげだ」と言いたい時に使おうとするはずだ。

他にも定期考査のテストを、一度受けたら終わりにせずには復習させるような工夫をした。長文だったら同じようなトピックの英文を読む、英作文をもう1回書き直してみる。こういった復習が下支えとなっていく。また、テストの復習と併せてノートを作成は是非お勧めしたい。授業ノートとは別の自主学習ノート。プログラム3の実践事例でも紹介したのだが、このノートに自己表現したものを書かせ、それを教師が校正する。それをもとに、最後の完成形を再度きちんとノートに書いてみる。あるいは模擬試験の模範解答などをもう1回自分なりにそのノートに書いてみるというのもいい。このように、基本的には授業を中心にしてすべてをつなげ、学び方を身につけさせていけば、後は自分でできるようになっていく。

5. 不安・課題からみえてきたもの—「まずはやってみる！」勇気を持とう 根岸雅史(東京外国語大学)

学習指導要領の解説には、「授業を実際のコミュニケーションの場面とする」ということが書いてある。実際のコミュニケーションの場というのは、インフォメーションギャップやオピニオンギャップがあるのが普通だが、授業では皆が同じ教科書を持っていて、皆が内容を知っている。それを実際のコミュニケーションの場面とするにはどのような仕掛けが必要なのかを考えなければ

ばならないと思う。また、指導の中で言語活動を実際に行っていれば、日本語で授業を行うと日本語の言語活動になってしまうので、必然的に「授業は英語で」行われるようになっていく。

アンケートから浮かび上がった「文法は日本語で解説しないと生徒は理解できない」という点については「日本語で解説すれば理解できるのか」と考えると、そうとも言えないのではないか。そもそも文法用語がわかっているのかという疑問もあるし、文法の説明と言ったときに、文法の形式の説明なのか、その文法形式の持つ意味の説明なのかによっても判断が違ってくる。「英語で行う授業」において大切なのは、後者の文法形式の持つ「意味」を文脈の中で説明することではないだろうか。

「苦手な生徒は英語だけでは理解できない」場合に、日本語を使えば理解できるのか。そもそも英語で授業をしようとしたときに無理なレベルの、難解な教科書が採択されている可能性がある。ということは、そのような教科書では、日本語で説明してもたぶん理解できない可能性がある。つまり、学習者のレベルと教科書のレベルが乖離してしまっている。学習者のレベルにあった教科書を選び、英語で教えて理解可能な授業をしていく必要がある。

「入試に対応できる学力をつけられるか」について。大学入試というのは実際には、高校で指導していることの一部しか問われていないにもかかわらず、それが高校での学習や指導を規定してしまっている。大学入試自体が変わらなければならない側面はあるものの、真の英語力があれば解けない問題はない。その真の英語力を育成するのは、高校での英語の授業。妥当性のない難問・奇問を解くための学習は意味がないし、そんなにめったにでない悪問に対する準備をしてもそこから得るものはない。そんなことにエネルギーを使うのは、もったいない。

最後の問題として教師の英語力について、やはり英語教師には、調べたことについてまとまりのある話ができたり、自分の仕事や専門分野に関しての講義や発表などを聞いて、それについて質問したり、自分の考えを述べたりできるようなレベルの英語力は必要。教師は完璧な存在のようにみえるが、間違わないと教師の学習も進まない。英語を技能として考えると、教師自身も勉強していかないといけない。そうすることで変わる授業観というものもあるのではないか。そして、まずは「えいやっ！」とやってみることが、一番大切な気がしている。

質疑応答

質問1 実際の授業の中での日本語使用について、具体的にどのようにすればよいのか(公立高校教諭)。

津久井 教師が生徒に「日本語でもいいよ」というのは禁句であると考えている。「日本語でも英語でもよい」となると、生徒は英語を使おうとしなくなる。

吉田 基本は「授業は英語で」組み立てるということだから、その大原則は守る。ただし、ここはどう考えても日本語で指導したほうが、効果が上がるものについてのみ、限定的に日本語を使うことはあるだろう。しかし、どちらでもいいとすると日本語に流れてしまうので、日本語を使うところははっきりさせて、メリハリをきちんとつける。

質問2 日本語と英語のコミュニケーションスタイル・論理の展開など含め、かなり違うが、そこまで考える必要があるか(大学教員)。

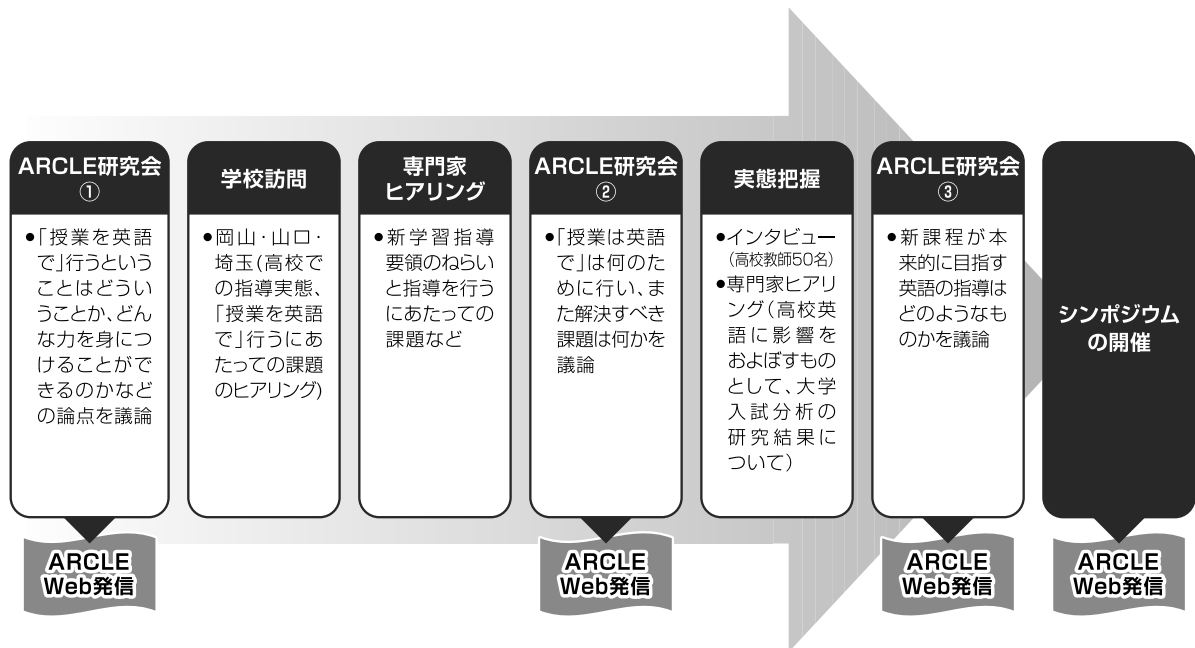
根岸 日本では、そもそも発言すること、自分の意見を言うこと、目立つこと自体しにくい環境がある。なので、「スタイル」とか「論理」の前に、解決しなければならない問題があるのではないか。こうした問題を解決するために、あえて英語で表現するとか、英語だから許されるというように仕向けて発表させるのも1つの手段かと思う。

アレン ある東北の小学校では1年生から言葉を言語技術としてとらえて、言葉を使って自分の思いをどのように伝えることができるか、それを児童にどのように訓練するかを先生方が外部機関で研修を受けている。その学校の6年生の外国語活動の授業を見学したが、自分の思いをとにかく自分の言葉で伝えよう、英語力が足りなくてもやってみよう、という姿勢があって驚いた。1つの授業の中ではなかなか難しいが、学校全体で取り組んでいるところでは確かに訓練の結果が表れている。(母語である)日本語で自分のことを言葉でどのように表すか、表現するかを教えてあげる必要がある。これは、私たち大人につきつけられた重要な課題だと感じている。

■ 2012 年度シンポジウムに向けての研究活動

1. 研究活動の概要

2012 年度は「高校英語」をテーマに、次年度より新課程を迎える高校英語をテーマに活動しました。下記の図のとおり、ARCLE 研究会を 3 回行い、各研究会にて議論を深め、そこでの研究を積み重ねた上で 12 月にシンポジウムにて研究成果として発信しました。



2. ARCLE 研究会でのレポート(ARCLE Web 発信)

シンポジウムに向けて開催した各研究会での研究理事・研究員の所感を紹介します。

2012 年度 第 1 回 研究会レポート

「英語教育研究 次年度新課程を迎える高校英語、『授業は英語で』を考える」

2012 年 6 月 3 日に ARCLE 研究会を開催しました。今年度の ARCLE は次年度より新課程を迎える高校英語をテーマに活動します(12 月にシンポジウムを開催予定です)。今回の研究会では、新課程での高校英語について、「授業は英語で」行うということはどういうことか、どんな力を身につけることができるのかなどの論点について議論しました。ここでは、その議論を踏まえた所感をご紹介します。

議論を踏まえての所感

慶應義塾大学 田中茂範

高校での英語の授業の課題は、授業をいかに活性化するかである。生徒にとってエキサイティングな授業にし、生徒に真の英語力をつけさせるための活性化である。「授業は英語で」はあくまでもその1つの手段であって、そのことを目的化してはならない。英語で授業することで、生徒が自然に英語を使う流れを作り出せるかどうか、そして英語学習の効果を高めることができるかが重要かつ考慮すべき点である。

英語での授業の実践例を観る機会を得たが、教師あるいは生徒が英語を使うという際に、前提として押さえておかなければならないことがある、という感想をもった。その前提というのは、授業での英語は spontaneous でなければならず、そのためには自然な英語であることが求められるということである。そのために必要なのは、必要に応じて情報を追加し、状況に応じて軌道修正を行うという実践的態度で英語を使うことである。それが会話の基本原理だからである。

東京外国語大学 根岸雅史

英語の授業を英語でやれば、すべての問題が解決するわけでもなく、日本語を用いているからといって、その授業が絶対ダメというわけではない。しかし、英語の授業を英語でやることで、英語教育のいくつかの問題が連鎖的に解決される可能性のあることは確かだろう。英語で授業を行うことにより、圧倒的に読みに偏った指導から、技能のバランスのとれた指導への移行が実現したり、言語知識の集積をめざす指導から、運用のための練習を重視した指導に変わったり、教室がコミュニケーションの場が変わったりする可能性がある。ただし、これらの変革が実効性を持つためには、入学試験もこう

した指導の学習成果をきっちり受け止めるように大きく変わる必要がある。

青山学院大学 アレン玉井光江

「授業は英語で」とは、日本語で行っていた授業を英語で行うという表層的な変化を指しているのではない。これは「英語が使える日本人¹⁾」の育成を早急に進める必要性から出てきた改革である。確かに、大学で授業をしていても、学生にとって英語はいまだに勉強の対象であり、彼らの「英語は使うものである」という意識は低い。どうすれば改革は成功するのであろうか。

私は小学校 6 年生を教えているが、高学年になると子どもたちの学びのスタイルに大きな変化が起こる。学習が個別化し、内側に向かっていく。思春期特有の精神的な変化もあると思うが、人と交わり、意見を交わし、必要とあれば対峙することを恐れず、協働していくことを、避けるようになる。このようにコミュニケーションの基本となるような姿勢が教室の中から消えていく。

英語の教室という言語環境の中で本気で、人と意見を交換する場面、つまり本物の social interaction が求められる場面をつくり、生徒がその中で英語を使い協働していくことを学ぶように指導する。決して簡単なことではない。しかし言葉は人との交わりの中、意味のある文脈の中でしか育たない。この当たり前のことをしっかりと銘記し、授業を根底から見直していくことが、我々英語教師に求められていると強く感じた。

東京外国語大学 長沼君主

新学習指導要領において、来年度の高校英語では原則として英語で授業をすることになったが、どのような英語力が教師に求められているのだろうか。1つヒントとなるのは教育実習生のための授業力 Can-Do リストである EPOSTL²⁾の、日本語版の J-POSTL であろう。他にも教師の発達枠組みを示した EAQUALS³⁾の A Profiling Grid for Language Teachers など近年公開されており、言語教師に求められる力が記述されている。「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」でも学習者の Can-Do リスト作成への提言と同時に、教師の英語力や指導力の強化が掲げられている。文部科学省が全国の高等学校・教育委員会に配布した授業実践事例映像資料(高等学校

20

版)には、様々な英語による授業の様子が収められているが、学習者の英語を引き出し、さらなる発話を促して、「できる感」を与えるためにも、授業中の教師の言語使用が要である。一方的な説明に終わらない、学習者に英語を使わせるためのひと工夫が求められる。

まとめ

上智大学 吉田研作

新課程での高校の「英語の授業は英語で行うことを基本とする」については、そのために考えなければならないことが多々ある。1つは、「基本とする」という表現をどう解釈するか。少なくとも、すべて英語で、という意味ではない。ならば、何をどこまで、どのように英語で行うのか。また、単に教師に英語力があればよいのではない。授業力に関わる英語力が求められる。それはどういうものなのか、どう訓練

すればよいのか。もう1つ考えなければならないのは、英語で授業を行うからといって、オーラルのみでなく、4技能すべてに関わることだということを忘れてはならない。さらに、教師だけが英語で授業を行っても不十分で、生徒も英語を使えなければならない。生徒がペアワークやグループワークのときに使える英語(質問したり、反論したり、主張したり…)なども併せて考える必要がある。英語で授業を行うと一言で言っても、そう簡単なことではないのである。

- 1 文部科学省 「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm
- 2 <http://epost12.ecml.at/>
- 3 <http://www.eaquals.org/>

2012年度 第2回 研究会レポート

「英語教育研究 次年度新課程を迎える高校英語、『授業は英語で』は何のためか。また解決すべき課題は何かを考える。」

2012年7月22日に ARCLE 研究会を開催しました。今年の ARCLE は次年度より新課程を迎える高校英語をテーマに活動しています(12月にシンポジウムを開催予定です)。今回の研究会では、新課程での高校英語について、文部科学省 向後秀明教科調査官やすでに取り組みを進めている高等学校にヒアリングした結果および実践事例をもとに、次年度新課程を迎える高校英語において「授業は英語で」は何のために行い、また解決すべき課題は何かを議論しました。ここでは、その議論を踏まえた所感をご紹介します。

基本的に英語で授業をすることについて

慶應義塾大学 田中茂範

英語の授業は英語で行う。これは基本だろう。しかし、高校英語教育の文脈で見ると、「英語で授業すること」が目的化されたかのような言説が目立つ。英語で授業することは、英語教育の手段であり、肝心なことは、それによって授業が活性化し、生徒の英語力の養成にプラスの効果をもたらすかどうかである。

来年度から新学習指導要領に基づく『コミュニケーション英語』がはじまる。問題は、どう教えるかである。従来型の指導法を英語に置き換えれば済むという話ではない。読解というより内容構成(content construction)が求められる。内容理解(reading comprehension)ではなく、生徒が自ら内容を構成

するという積極的態の実践が求められるのである。読んだテキストに対して口頭であるいは文章でリアクションを行うという Read and React の流れが工夫されなければならない。そこでは、テキストの中の論点について discussion & presentation を行うという授業が期待される。そして、語彙・文法指導を孤立させるのではなく、Language in Text という視座が必要となる。検定教科書の責任編者として、「どう教えるか」という HOW の問題にしっかりとコミットしていきたいと考えている。

Partial learning の可視化

青山学院大学 アレン玉井光江

英語で授業を進めるという今回の方針に対し、生徒や先生から「日本語で理解しないと(させないと)不安である」という声が出ていたと聞きました。確かに英語の時間でも日本語を効果的に使用し、学習者の学びを促進させることは大切だと思います。ただ、英語を使うことを学ぶためには、どうしても「曖昧さや不明確さ」に耐える力が必要で、それを日本語で補うことはできません。ある時点でわからなかった、理解できなかった、でも続けていくうちに理解できた、という経験は英語だけではなく他の教科でもあると思います。知識とは all or nothing で身につくものではなく、少しずつ自分の中に構築されていくものだと思います。英語で授業を進めていくためには、先生も生徒もこの partial learning を可視化し、納得していく技術を身につけることが必要なかもしれません。

英語で授業をするために

東京外国語大学 根岸雅史

英語の授業を英語で行うためには、教師自身がある程度英語が使いこなせる必要があるのはもちろんだ。しかし、英語力以外にも乗り越えなければならないハードルがいくつもある。1つは「指示力」。教室での作業を生徒に指示する力である。2つめは「質問力」。教室での教師の英語使用は、日常の会話に比べ、明らかに「質問文」が多くなる。3つめは「コメント力」。現実の会話では相手に言わせっぱなしにすることはない。4つめは「関心力」。生徒のことや教材、世の中の出来事、など様々なことに関心を持つことが重要である、エトセトラ、エトセトラ。ただ、最も重要なのは、英語での授業を始める勇気である。必要な力は後からついてくる。

教室内教師英語力 can-do を考える

東京外国語大学 長沼君主

英語で授業をする力を測定するものさしとして、香港では 4 技能を測るテストに、授業観察による Classroom Language Assessment (CLA) を加えた、Language Proficiency Assessment for English Language Teachers (LPATE) が開発されている。CLA では、語彙、文法、発音といった言語面だけでなく、指示や説明、生徒とのインタラクションといった教授面も 5 段階で評価される。現在、科研¹において、LPATE と同様の枠組みによる教師自律性支援のための教室内教師英語 Can-Do 尺度を開発中であるが、下位尺度として、誘出 (Elicitation)、促進 (Facilitation)、明確化 (Clarification)、修正 (Recast)、意見 (Comment)、評価 (Assessment)

などの機能別尺度も設けている。英語での授業にあたっては、学習者の発達段階をモニターし、自らの言語を調整し、必要に応じて足場を与えると同時に、教室全体を意識したフィードバックを与えるような教師発達を促す教師認知力の向上が必要だとされるであろう。

- 1 平成 22-24 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 日本人英語教員の英語力向上に役立つ「教室内英語力」の評価尺度の開発、課題番号: 22530969
研究代表者: 中田賀之

まとめ

上智大学 吉田研作

高等学校で英語の授業は基本的に英語で行うことになる。もちろん、だからといって、全て英語でやれ、ということではない。ただ、一番大切なのは、言語はコミュニケーションの道具として使ってこそ身につくのであり、日本語中心の英語の授業では、英語の知識は得られても、コミュニケーション能力は身につかない。生徒にとって英語に接する場面は、殆どの場合、授業以外にはあまりないだろう。なのに、そこから英語を取ってしまったら、生徒はどこで英語を使えばよいのか、ということになる。教師の立場からは、授業のはじめと終わりを英語で行う。授業運営 (classroom English) に関わる指示などを英語で行う。内容理解は、5W1H を使ってできるだけ英語でやる。しかし、何よりも大切なのは、生徒にいかん英語を使う機会を多く与えるか、である。ペア・ワーク、グループ・ワークなどを通して生徒が英語でコミュニケーションする体験を積むことが最も大切だ、と言っても過言ではないのである。

2012 年度 第3回 研究会レポート

「英語教育研究 次年度新課程を迎える高校英語、『授業は英語で』どのように行うのか。」

2012 年 9 月 30 日に今年度 3 回目の ARCLE 研究会を開催しました。今年の ARCLE は次年度より新課程を迎える高校英語をテーマに活動しています (12 月にシンポジウムを開催いたします)。今回の研究会では、12 月のシンポジウムで実践事例をご紹介いただく群馬県教育委員会 津久井貴之指導主事 (2011 年度パーマー賞受賞) をお迎えし、津久井先生の実践 DVD を拝見しながら、新課程が本来的に目指す英語の指導はどのようなものかを議論しました。ここでは、その議論を踏まえた所感をご紹介します。

「授業は英語で」- 忘れられた「言語活動」

東京外国語大学 根岸雅史

高等学校新学習指導要領の英語の「授業は英語で行うことを基本とする」という言葉が注目を浴び

ている。しかし、本当に注目すべきは、解説にある「英語による言語活動を行うことが授業の中心となって」いるという部分だろう。つまり、「言語活動」なしに、教師が一人で英語で話していてもだめだということである。

また、津久井先生の「単元や授業のねらいを明確にすること≠その授業で身につけること」という指摘は、まさに的を射ている。高校生が使う表現が中 1、2 レベルというのはよくあること。授業のねらいを明確にして、それを直後に評価する。しかし、それでできていたからといって、生徒が本当に授業のねらいを身につけることになるとは限らない。これは今後の英語の評価のあり方への重要な問題提起となっている。

「英語で授業」が可能にする「教科としての英語」から「言葉としての英語」へのシフト

慶應義塾大学 田中茂範

多くの生徒は「英語」というものを「教科」として捉える傾向がある。彼らにとって、英語は教科書の中にあり、問題集の中にあり、そして英文和訳の中にある。しかし、本来の英語は生活の中に息づく「言葉」のはずである。

高等学校新学習指導要領における「コミュニケーション英語」は「言葉としての英語」観に強調点を置くものである。だとすれば、新しい教科書を導入するだけでなく、その教え方も新たにすることがある。新たな指導法の開拓において新学習指導要領の中にある「英語の授業は英語で行うことを基本とする」の文言は十分にインパクトのあるメッセージを含んでいる。

英語で授業をすれば、「英文和訳」という言語の置き換え活動を抑制する効果がある。英語で授業をしているとき、「この英語を日本語にしよう」というのは端的に不自然だからである。ここで注目したいのは「英文和訳」は従来の日本の英語教育の象徴的な活動であったということである。教師も生徒も和訳を通して英文を理解することに拘泥してきた。しかし、英語で授業をすることで、「英文和訳」活動が封印されると、新たな活動(英語の学び)の地平が拓ける可能性が出てくる。そして、その新たな活動を通して、生徒の英語観も「教科としての英語」から「言葉としての英語」にシフトしていくということが期待できる。

おそらく、さまざまな言語活動が工夫されるだろう。しかし、「言葉としての英語」という観点からみて健全な活動は、「authentic で、meaningful で、personal なもの」であるはずである。しりけない場を作り、授業が生産的で創造的な活動になるためには、教材も活動も本物であること(authentic であること)を追求する必要がある。しかし、同時に authentic であることが生徒に響く効果を生むには、提示される教材と活動は meaningful でなければならない。理解できる(わかる)ということが authentic であること条件なのである。そして、それに加えて、personal であること、これが「言葉としての英語」に実感(reality)を与えるための条件である。

いずれにせよ、生徒一人ひとりが我がこととして英語を引き受け、英語を我がもの(my English)として構築するという自覚を持つことができるような教材と活動が必要となる。

教科書をベースとした can-do を考える

東京外国語大学 長沼君主

学校の文脈に合わせた can-do リストを作成する際に、最終的に期待されるパフォーマンスを記述するのではなく、教科書をベースとした日頃の学習のプロセスを記述することで、どのような学びが起きているかが可視化される。現在、小中高それぞれの教材・教科書で can-do 作成に取り組み始めているが、留意すべき点は異なる。

小学校外国語活動では、定着を前提としない活動づくりにより、毎回の学びを保証するための仕掛けづくりと、毎回の授業および各課を通じた児童の変容を引き起こし、「できる感」を与えるための活動の段階化が求められる。中学校の教科書では、文法中心の活動の組み立ての中で、背後に潜む機能に焦点を当て文脈化を図ることに加え、本文における文法への気づきを高める工夫が必要となる。

高校の教科書では、本文、ドリル、活動を有機的に結びつけ、英語での発問を通して本文の深い読みを促すと同時に生徒の発話を引き出し、さらには、内容的理解をベースとした活動をデザインすることで、内容言語統合型(CLIL)の思考を求める学びにつなげていくことができる。

こうした教科書の特徴をとらえながら、一貫した学びをどう展開していくかが今後の課題となるであろう。

CAN-DO を目指す英語教育のあり方

上智大学 吉田研作

CAN-DO を具体的な達成目標に置くことで、英語教育の改善を図ることが、現在文部科学省が考えていることだが、今回の議論の中でも出てきたように、気をつけなければならないことは、教師が CAN-DO の目標に向けて一生懸命教えても、生徒が実際「Yes, I can.」と自信を持って言えるようにならないと意味がない、ということである。つまり、CAN-DO を目標化しても、教師が「この単元では〇〇という CAN-DO を教えるんだ」と意気込んで、dialogue の暗記、CAN-DO を実現するための表現のドリル、あるいは、パターン練習のような、いわゆる教師中心の授業を展開したとしたら、結局空回りしてしまうだろう。本当に CAN-DO を目標にするためには、生徒中心の授業展開の中で、いかにコミュニケーションをさせる機会を増やすかがポイントだということを忘れてはならない。

■ ARCLE について(2012 年度現在)

■ 概要

正式名称	Action Research Center for Language Education(ARCLE/アークル) * ARCLE はベネッセ教育研究開発センターが運営する英語教育研究会です
事務局	〒163-0411 東京都新宿区西新宿 2-1-1 新宿三井ビルディング 13 階 (株)ベネッセコーポレーション内

■ 研究員一覧(五十音順)

研究理事	アレン玉井光江(青山学院大学教授) 金森強(松山大学教授) 田中茂範(慶應義塾大学教授) 根岸雅史(東京外国語大学教授) 吉田研作(上智大学教授)* 研究理事代表
------	---

研究員	長沼君主(東京外国語大学講師) 加藤由美子(ベネッセ教育研究開発センター) 横井理絵(ベネッセ教育研究開発センター) 吉池陽子(ベネッセ教育研究開発センター)
-----	--

■ ARCLE の刊行物

2005年度刊行分

幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み—ECF

「ECF(English Curriculum Framework)」は、「実践に役立つ英語コミュニケーション能力」を目標とした英語教育全体の指針となります。英語教育全体をどう捉えるか(グランド・デザイン)から始まり、幼児から成人までの発達段階別目標や評価について、具体的な指針を詳細に示します。英語教育の発展のために、教育研究や実践の場で、論議され、広く使われることを期待します。

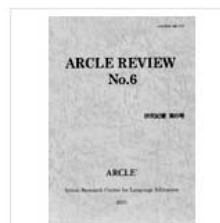


発表 : 2005/8/30
分類 : ECF関連
研究者・著者 : ARCLE編集委員会

2011年度刊行分

ARCLE REVIEW No.6(研究紀要第6号)

発表 : 2012年3月10日
分類 : 研究紀要
研究者・著者 : ARCLE
関連リンク : [ARCLE REVIEW No.6\(研究紀要第6号\)](#)



* 研究紀要は Web からダウンロードできます

online ISSN 1881-1787



上智大学・ベネッセ応用言語学シンポジウム報告書

発行日 2013年3月10日
編集・発行 Action Research Center for Language Education (ARCLE/アークル)
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング 13階
(株)ベネッセコーポレーション内
<http://www.arcl.jp/>

©Action Research Center for Language Education 2013
Printed in Japan 無断転載を禁じます。